

痴漢捜査

晒された

牝偵
W調教

小説 高岡智空

挿絵 ともみしもん

立ち読み版



第一章	都市警隊のエース	006
第二章	車内包囲の罨	049
第三章	強制拘束散歩	097
第四章	衆人環視露出	150
第五章	牝偵籠絡	196
エピローグ	エースたちの淫墮	239

登場人物紹介

Characters



くろさわういか
黒澤初華

都市警隊、鉄道犯罪の対策チームが置かれる分署十課のエースとして活躍する捜査官。PCネットワークを駆使した捜査が得意。

くどうようこ
工藤鏡子

初華と同じく、都市警隊、分署十課で活躍する捜査官。武道にも精通し、犯人を自ら取り押さえてしまうほどの実力を持つ。

「んぐっ、んっ、んむううっ……ふうっ、ふっ、んふううっ……んううっ！」

両腕を背中で固められ、スカートの裾を使つて縛りつけられてしまう。薄地の黒パンストとショーツだけに覆われたヒップをプリプリと揺らしながらも、それが陵辱者たちの目を愉しませているとも気づかず、拘束から逃れようと初華は懸命にもがく。

（だめっ、外れませんか……ど、どうしたら……きゃっ！ やっ……いやですっ……）

けれど手の動きは非情で、一本の腕は肉づきのよい、身長割には大きめといえる尻肉を形が変わるほどに捏ね回し、それでいながら指先でくすぐるようなタッチを与えてくる。別の指は脚の付け根から膝までを何度も何度も、マッサージするように往復しながら、太ももの柔肉を特に念入りに撫で回し、黒パンスト越しにもそれをはつきりと意識させようというのか、時折爪を立てて、カリカリとむず痒い刺激を走らせていた。

「んぐうううっ……んふうっ、ふううっ……んっ……くうっ……」

ブラウスのボタンはすべて外され、背後から回った二本の腕に、下着越しの慎ましい乳房が指先の動きだけで弄り廻られる。ショーツと同じく、レースで飾られた純白の可愛い乳は懸命に少女の柔肌を隠しているのに、陵辱者の手の動きを受けて、見る間にずり上げられてしまう。けれど手の動きはあえて乳房をブラに隠したまま、その上からゆっくりと、乳頭の敏感な部分にはけて触れることなく、白肉だけをフニフニと揉みだいて、胸の奥に染み込んでゆくようなヌルい刺激だけを送り込んでくる。

（んやっ、やっ……はっ、うっ……んくううっ、うううんっ……なん、なんっ、ですか、こ

の人たちっ……こんな、や……やら、しい……触り方、ばっか、りっ……いいっ！

経験はなくとも、手の触れる箇所から注がれる感触と、体温の高揚する感覚から、聞き知ったことのある快感に近いものだということは、なんとなく理解できた。けれど慣れていない身体にそれらの刺激は強烈で、嫌悪感や気持ちの悪さのほうがり、背中には寒気が走って腫に涙が浮かんでくる。

（いやっ……放してっ、こんな……こんなの、いや、ですっ……んっ、くうんっ……）

尻を撫でている指先が時折、尻肉谷間を往復しながら股下に滑り、汗塗れのショーツが食い込む淫裂をスリスリと擦り上げてゆく。刹那、それまで感じたことのないような、電流のような痺れが下腹部を走り、膝がカクカクッと小刻みに震えてしまう。

「んむうううっ！ んっ、くっ……んうううっ……んふうっ！」

思わず顔を上げ、全身を小さく跳ねさせてまで反応を示してしまったことで、手の動きが大胆になる。こちらの反応を確認するように、指一本で軽く触れていただけだったショーツの奥の股肉の膨らみに、今度は手の平を這わせ、揉み込むように往復しながら、内股を弄るように積極的に触ってくる。

（やっ……やめっ、急に、激し……つくううっ、んっ、いやっ、やああっ！）

気がついたときには遅かった。キラリと反射するなにかが視界をよぎったかと思うと、次の瞬間、刃物で切断されたブラが腋の隙間からスルリと抜き取られ、覆うもののない小振りな乳房が露わにされてしまう。

「——つつ!! う、うそつ……なん、で……こんなつ、やつ……つつ」

万が一、手の拘束が解けてもブラウスやジャケットを留められないようにしようというのか、ハサミは滑らかに動いてボタンの糸を切断し、千切れたそれらがコッソッと音を立てて足元に散らばってゆく。その音がたまたま耳に入った乗客が、顔をこちらに向けそうになったのに気づき、耳まで真つ赤に染めた初華は慌てて背を向けた。

（いやだつ、やつ……み、見られちゃいますつ……んつ、ううううつ……）

周囲の視線がこちらに向くことを恐れ、顔と身体の正面を壁に向けるように方向転換し、背筋を丸めて縮こまる。しかしそうなると今度は逃げ場所も、もがくためのスペースさえもなくなり、人壁に追い込まれた檻の中で、無数の手によつて苛辱を与えられる。

「んんんうううつ、んつ、んぶうう……んううつ! ふむうつ、んつ、んん——つつ!」

肌を晒され、視線を意識したことで羞恥心がさらに高まってくる。いま自分が上半身をほぼ剥きだしにし、スカートをまくり上げたお尻丸出しの姿で拘束されていることに、誰もがついていないだろうか。それを思うだけで消え入りたくなるほど恥ずかしくなり、意識しないでおこうとすればするほど、周囲の気配や自分の感覚が研ぎ澄まされ、触れてくる手の感触がはつきりと刻み込まれてしまう。

胸元を晒る両手を防ぐ壁はすでになく、晒された乳房を遠慮なく揉み擦られる。真つ白な肌を両手に包まれる程度に膨らませた、白雪の丘のような乳肉は女の手の中でたわみ、弾力と瑞々しさを見せつけて反発し、押し潰されながら胸の奥に熱い迸りを注いでゆく。

ムニユツ、クニユウウ……と乳房がひしゃげるたびに背筋が舐められたような寒気と、痺れるような感覚に襲われて、何度も何度も、華奢な体躯が跳ね躍る。その反応を愉しんでか、両手は玩具のように胸を弄り、乳球の頂点を手の平でコリコリと擦ってくる。

「んふううううっ！ んぶっ、んっ……んうっ、んっ、んうううっ……」

うっすらと色づいた小梅のように、色鮮やかで小さな乳頭は、覚えたばかりの甘い刺激にピンと尖って自己主張し、添えられた手が微かに動くだけで擦れてしまう。けれど女の手はそれだけの愛撫では済まさず、時折指を浮かせて周囲に乳房を見せつけるようにしながら、二本の指で紅色のニブルをキュウツと摘み上げて刺激を与え続ける。

（ひゅぐううっ……そ、そんな、とこお……んあつ、し、しないでえっ……）

シャワーやバスタイムの中でも、柔らかなスポンジでしか触れない敏感な部分に強烈なタツチを受けて、痛みと、その奥に息づいた微かな甘痒さを覚えて四肢が跳ねる。そのタイミングを見計らって股間が強く擦られ、お尻を力強く揉まれてしまうと、立ってられないほどに膝が震え、喉の奥からネコの甘えるような声が響いてしまう。

「んきゅううう……ふっ、んゆうううう……んあつ、ふうううう……」

大量の汗でパンストもグショグショになり、その奥のショーツなど言うに及ばないほど濡れそぼっていた。肌擦れる不快な感触と疲労で、ハアハアと荒い息がガムテープの間からこぼれる。クスツと耳障りな笑い声が、周囲から聞こえたような気がした。

（んっ、くっ……な、なにが、おかしいんですっ……え、やつ……ひゃうっ！）

ペトリ——と冷たい金属の感触がパンストの上に感じられた。恐怖に全身を引きつらせるも、それが殺傷目的でないことにはすぐに気づかされる。

(えっ——そんなっ、うそっ……やめてっ、やめてくださいっ！)

胸の奥で思いきり叫んで、思わず身を振って逃れようとするも、刃に肌を切られる痛みを思うと、その動きが止まってしまふ。おとなしくなつた下半身をハサミの感触が這い、そのままシャキンシャキンと音を響かせて、下半身の布地を切り裂いてゆく。

(あっ、あああ……うっ、くっ……ううっ、ううううっ……)

ただ切られるだけではない、それは完全に、陵辱の手段としての衣服の裁断だった。縦横斜めにデタラメな刃の軌跡が通り、切つたというよりはズタボロにされた残骸が足に絡みつくという有様。しかも、その動きはまだ止まろうとしない。

「——つつっ!? ふくっ、んっ……んぐうううっ、うあああつつ……」

ジャキジャキッと軽やかに動かされたハサミはショーツの端をあつさりとはち切り、その薄布さえも奪い取られる。ベチヨリ……と汗をたっぷり吸つた繊維の感触が太ももを撫で、そこに直接触れた空気の感触が体温とは正反対に、やけに冷たく感じられた。

(わ、わたし、こん、な……車内で、こんな、格好……つつ、どうしてっ……)

ポロツ、ポロツと涙が頬を伝い落ちる。もはや拒絶するために動くこともできず、それをいいことにハサミや女たちの手は好き勝手に身体中を動き回る。

胸を散々に揉みしだかれ、乳首は摘まれて転がされ放題。パンストのなくなつた太もも



を遠慮もなにもなく撫で回され、プリンツと震える大桃尻は両手で谷間を開くようにしながら捏ね回され、股間では無数の指が蠢き躍っている。

「んぐううつ、んふつ、ふうつ　ふうう——つつ！　んつ、ふあつ、ふうううつ……」

抵抗する気力すら起こらないほど混乱しているのに、身体は甘い刺激を受けて反射的に弾んでしまい、手や指の動きに合わせてビクッ、ビククンッ！　と面白いように反応を見せつけてしまう。それだけでも情けなく、悔しくてたまらないのに、孤独な車内で見知らぬ他人に包囲されて痴女行為を受けている恐怖が、それ以上に大きく心を占めて、ただこの嵐が過ぎるのを待つばかりだった。

その耳には絶えず、シャキシヤキと衣服を裂くハサミの音が響き続け、さらに惨めな感情を煽り立て、嘲笑っているようにさえ思えてきた。

（やつ、やです……スカートも、あつ、ううつ、ブ、ブラウスも……お気に入りの、ジャケット、まで……うぐつ、ぐすつ……ひ、ひどい……ひどすぎますつ、ううつ……）

身体を觸る手の数は減っていないのに、さらに痴女の数が増えたのか、スカートの代わりに人の手で両手を押さえられる。そしてスカートを元の状態に戻して、ハサミがそれを切り裂いてゆく感触だけが、空気の流れで伝わる。パンストもショーツも失って剥きだしになった太ももが、さらにスカートでも守ることが許されなくなり、電車内の空気に撫でられてゆくのがわかり、ゾクツと背中が震え上がった。

（……こんなの、もう……は、裸同然、じゃ……ない、ですかつ……うくつ……）

微かにでも屈めば、すぐにスカートの中が覗けてしまうような、股下数ミリというほどの超ミニスカートに生地をカットされ、白い太ももは剥きだし、お尻も三分の一ほど見えてしまっているような状態。上半身など、胸の間をネクタイが揺れているだけという悲惨な有様だ。

（ぜ……絶対に、許しませんっ……この人たちもどうせ、どこかで降りるはずですっ……そのためにわたしの手を放せば、そのときが……っっ）

彼女らの顔を確かめるチャンス——一瞬だけ、怒りが恐怖を上回った初華がそう決意を固めたのだが、痴女たちの行動は一步先を行っていた。

「んぐっ、んっ……んうううっ!？」

両手の親指が、針金で適当な緩さにまとめられてしまう。自力でも解けなくはないが、それでも一分以上の時間はかかってしまう。それを証拠品にしようにも、かけられたときの感触からして、直前に手袋でも嵌めていたようだった。

（そ、んな……あつ、あああつ……）

すぐには解けないのを確認したからか、痴女たちの手があつという間に遠ざかり、その気配までが遠のいてゆく。しかもそれと同時に、耳に届いたのは車内アナウンス。初華は身をビクッと震わせることになる。

『次は、将徳寺（しょうとくじ）のお出口は右側、お忘れ物ないよう、お願い致します……』

（逃げられ……いい、いえっ、それ以前に……は、はやくっ、針金を外さないと……）

抵抗の言葉も虚しく、豊満な乳房にブラは軽々と押し退けられ、鳥越の指で乳頭をきつく摘み上げられたままの、釣鐘状に引つ張られた双丘がまるび出てしまう。反射的に腕を引いて覆い隠したくなるが、ガチャガチャと手首の錠が鳴るばかりで、自らの肉体が晒しものにされる恥辱に、鏡子は思わず胸中で悲鳴を上げていた。

「うっひよおっ！ 綺麗な乳してんなあつ！」「電車で露出ブレイなんて逮捕モンだがよ、それなら芸術品でセーフじゃねえか？」「ひひひっ、さっさと揉んでみてえぜ……」

男たちの言うように、お腹や首筋の白さと変わらないくらい、いやらしく膨らんだ乳房は真つ白なミルクのように輝いている。形も崩れているようには見えず、鳥越が手を離れたところで双乳の頂点はツンと上を向いて震え、男の欲情を一身に引き受けることだろう。事実、鏡子は日々のエクササイズを欠かしておらず、ボディラインの崩れなど微塵にも感じさせはしていないのだから。

そしてなにより圧巻で淫らなのは、男の指に挟まれながらもその大きさを誇示し続ける、薄桜色の乳突起だった。元々のサイズが人よりも大きいせいで、勃起してしまったそれは女性の小指半分ほどの長さがあり、指の間で潰れぬぐらいたく膨らんでしまっている。遊び慣れた女のように肥大な乳首だが、その色合いは肌や乳輪と同じく色素が薄く、生娘のそれを思わせるほど、まるでくすんでいない。

その印象のギャップが妖しい魅力を感じさせ、それを摘まれて喘ぎを上げる鏡子の姿は、ますます男の劣情を引き寄せて止まなかった。

「バキバキ勃起乳首のエロ肉、だしちまったなあ、鏡子ちゃん……いや、鏡子よお？」
「くっっ……馴れ馴れしいのよ、このド変態の下衆男どもっ……くひゅうっ！」

苛立ち混じりに吐き捨てようとするも、低く潜めたはずの声は、甲高い嬌声に塗り替えられる。それを聞いてニヤニヤと笑いながら、指先だけでシコシコとニプルを弄り、鳥越がささやきを続ける。

「ド変態はてめえだろうが、露出狂のマゾ牛い……わかってんだぜ？ さっきっからてめえ、乳触られても耳ねぶられても、アンアン喘ぎまくり……こりゃあ昔、相当遊んでたんじゃねえか？ かなり気合入れて仕込まれねえと、こんな簡単にやいかねえ……」

「……っつ！ じよ……冗談は顔だけにしなさい、私はそんな軽い女じゃないっ……」

その指摘に、一瞬だけビクンッと身を竦ませたものの、なんとか否定して顔を背ける。けれどブラウスに包まれた背中にはびっしりと汗が溢れており、鼓動はさきほどまでよりもかなり速く、緊張を訴えて高鳴っている。

「ククッ、またブルってる顔してんぜえ？ まあいい、その辺も含めて、俺だけじゃなく痴漢の方々にも遊んでもらうとすつか」

「ひゃふううっ!! んっ、はっ……なに、を……っ」

ピシッと指を鳴らすように弾かれた乳首が、ようやく鳥越の手から解放される。しかし度重なる愛撫と執拗に浴びせられた快感によって、もはや敏感突起は完全に屹立してヒクヒクと震え、空気に触れているだけでも弄られていると錯覚してしまうような、熱く鈍い

疼きを発していた。そして――。

「さあて、鳥越さんの許可も出たことだし、まずは俺らからだ」「ふふ、そうですね」
そこへ、前の座席に座っていた男二人が立ち上がり、顔を胸元に寄せてくる。大学生くらしい若い男と、くたびれたサラリーマン風の中年――なんの関係もないような二人の男は、どちらもいやらしく手を蠢かし、視線は鏡子の豊乳へ釘づけになっていた。

（ちよ、ちよつと、なによ……つっ!? まさかつ、だめつ……やめなさいつ――）
脳裏によぎった不安、だがそれを拒絶するよりも早く、男たちの顔が乳房に埋まる。

「はぐつ……んじゅううううつっ!」「ふほほほつ、おむつ、んじゆるつ……」

「ひつ、ぎつ……くひいひいんつっつ! いひあつ、はつ、やはあああつ!」

ヒクついた乳頭が男たちの口内に飲み込まれ、強烈な吸い上げとともに舌先で何度も擦り上げられる。たちまち目の前には火花が飛び散り、想像だにできなかった――いや、忘れかけていた圧倒的な乳悦に全身が穿たれ、ビクビクンッ! と跳ね震えてしまう。

「ひいひい、あつ、ふああつ……んぐつ、くふうううんつっ!」

片方の乳首が歯先でガジガジを甘噛みされ、そのまま鳥越の指でされていたように扱き立てられる。それだけでも狂おしいほどの淫熱が胸の奥で暴れ回るのに、それに合わせて柔肉肉までが両手で解すように揉みしだかれ、一瞬にして膝がくずおれてしまう。

中年男が吸いつくほうの乳首は口内に乳輪までが取り込まれ、その口内で舌が縦横に躍って刺激を絶え間なく送り込んでくる。ペロペロと激しく動く粘体に唾液をたっぷりと絡

められ、口内粘膜を窄めて赤子のようにニプルを包み込む愛撫に晒されると、胸の先がトロトロと蕩けてゆくような、嫌悪と同じくらい大きな快感に苛まされる。

「ほおれ、その反応だ。こりやかなり、仕込まれてやがったみてえだな」

「んくつ、ふうううつ……ひ、ひがつ……ちが、ううつ……私は、そんなふしだらな、ことお……くおつ、んおおおつ！ ひやめつ、ろおおつ……」

唾えられる前からはち切れんばかりに勃起していた乳首はもはや、男たちの口陵辱で従順な性感帯に躑けられてしまったかのようだった。唇や舌が動いた時、それが僅かな刺激であつても乳先が爆発するような強烈な快感に変わり、背中を大きく跳ねさせて、快感に悶える声を上げてしまう。

「ほう、そうかい……だったらよお、こっちの湿り気はどういうこつた？」

——グチュウウウツ……ジユグツ、ニチュグチュウウ……

「きゃひいっ!! いひやつ、は、なつ……し、なさつ……あきゆつ、んふううつ！」

スーツのパンツ越しに鳥越の手の平が股間を激しく擦り上げ、そのままマッサージのように揉み込んでくる。太ももから下腹部に、生温かいネチヨオオ……と絡みつく粘液の不快な感触が染み広がるとともに、鋭い快感電流が脊髄を這い上がってゆく。

「おらあ、聞こえてんだろが、この音がなあ……ニツチャニツチャと服の上からでもわかるぐらい濡らしやがつて、わかってるのかあ？ 俺あまだ、耳やら首やら、乳の先くらいしか触ってねえんだぜ？ ンなことて濡らすようなド変態女なのか、てめえはよお？」

「ふぐううつ、んっ、くうううつ……ち、がう、私っ……私、はあっ……」

頭を振って否定するも、すでに身体は思いだしてしまっていた。

(やっ……くっ、この、触り方っ……んうっ、あ、アイツと、似てっ……ひうんっ！)

それは鏡子がまだ大学生だった頃、これまでの人生で付き合った唯一の男との、忘れようもない一年間の記憶。別れてから知ったことだが、その男は大学でも有名な性豪であつたらしく、当然のように処女だった鏡子は身体を許してからというもの、毎日のようにその多感な肉体を觸られ、あちこちの性感帯を徹底して磨き上げられたのだ。

隅々にまで彼の手は届いていたものの、性交を繰り返しても媚肉や乳首の色がくすまな
いことで、乳房と膣は特に念入りに仕込まれていた。そんな爛れた生活を続けているうち、
鏡子は次第に恐ろしさを感じ、男と別れてそのことは忘れようとしていたのである。

「クッククツ、否定しきれねえってこたあ、どうやら正解だったかあ……ま、とりあえず
はそのお相手に感謝するとして……」

——ピッ……ピイイイッ、ブリッ、ブリイイッ……

「あひっ、んっ、なっ……にを、すん、のっ……くうんっ！」

鳥越が小型のナイフで手際よく股間とその周囲を引き裂き、びしょ濡れになったショーツが晒しものにされた。ブラとお揃いのショーツは愛液のせいでさらに色濃く黒くなり、
薄布には淫裂の形がくつきりと浮かび上がる。

「うおおっ！ さすが調教済みマンコ！」「おもしろみてえだぜ、デカ乳捜査官殿！」

(くううんっ……だ、黙りな、さいっ……っ、ああっ……)

椰榆する声に耳を閉ざすこともできず唇を噛んだ、その耳元に鳥越の声が響く。

「そろそろこっちのほうも可愛がつてやろうかねえ……こうやって、なあ？」

「ひっ、やつ……ああ……んっ、あはっ……あうっ、んっ……んくうう……」

垂れ落ちた愛液で濡れる太ももの間に、硬く熱い欲棒がヌチュリ……といやらしい粘質音を響かせながら捻じ込まれる。触れるだけでもその大きさははつきりと感じられ、久方ぶりに感じる逞しい牡の感触に、鏡子は豊満な尻房をタップンツとはしたなく躍らせて、肉悦に声をもらしてしまふ。

「くっはあ……あつたかいぜ、鏡子お……ククッ、パンツ越してもわかるぜ、この熟れたマンコの味はたまんねえな。早く挿れて、つておねだりするみてえに吸いついてきやがる……ほれ、てめえも感じてんだろうが」

「んひゅっ、はっ……だ、誰がつ、そん、なあっ……あくっ、はんっ、あはああっ！」

鏡子が気丈な言葉を吐くのを待っていたかのように、両乳首がほぼ同時に唇で押し潰され、先端をしつこくチロチロと舐め回されながら、引つ張り上げられた。嬌声を轟かせながら、すでに緩み始めていた陰唇の奥からはトロトロの濃牝液がゴポオッ……と音を立てて溢れこぼれ、ショーツを易々と通過して鳥越のペニスに浴びせかけられてゆく。

「クククク、すげえ濡れ方だなあ、ええ？ 自分で仕込むのいいもんだが、調教済みマンコつても愉しみて仕方ねえ……どうすつかなあ、そろそろ挿れつかなあ？」

「あふっ……んっ、くっ、ひうううっ……んふっ、あつ、はああ……」

ニチュツ、クチュウウ……と愛液を絡めるようにして、鳥越が腰を揺すつて肉棒を擦りつけてくる。浮きだした血管の感触がはつきりと太ももに当たり、張りだした肉傘でショーツ越しに淫裂を引つ搔かれる快感に、膝がガクガクツとはしたなく揺れた。

——チュブツ、グチュツ、ジュブウウ……ニチュウツ、チュブツ……

(んっ、はああっ……悔しいっ、こんな……もう、何年にもなるっていうのに……い)

開きかけた唇を引き締めようとするが、ギリギリのところ唇が触れ合わず、半開きの口から吐息がもれる。首を振って心を奮い立たせようとしても、腰を押し当てられると同時に、布越しの陰核が亀頭の傘にゴリゴリと削られてしまうと、それだけで脊髄を駆け抜ける甘い電流の量が倍以上にも膨れ上がってゆく。

(身体が、忘れていないっ……こんなに、き……くううっ、気持ち……うううっ！)

気持ちいい——心の奥から何度も顔を覗かせるその言葉を懸命に押し殺しても、パンパンと腰を叩きつけられ、太ももと淫裂を牡槍で擦り立てられると、膣道がビクビクと蠢動する感覚まではつきりと感じられ、熱い牝蜜が泉のごとく湧き溢れてゆく。すでにおもらしでもしてしまったかのように股下や太ももは完全に濡れそぼり、ショーツもズボンの生地も、熱い粘液で肌貼りついていた。

「くううっ、たまんねえなあ……さあて、どうする？ 挿れて欲しいんじやねえか？」

「んっ、なっ……わけ、がああ……はふっ、んっ……な、ない、れ……ひゅうっ!!」



「んくうううつつ……そんなのっ……ひきつ、いはああ……む、無理い……」

唇をキュッと引き締め、なんとかそれだけを言い返すも、肌を啄むように浴びせられるキスの嵐に、声の上擦って身体がピクピクと躍ってしまう。

「んじゅつ、ちゅつ、ちゅばああ……ふふ、そう言うと思ったわ。だけどそんな初華ちゃんのために、変わった趣向を用意しておいたのよ。ほら、準備ができたみたい」

もう少しで粘膜に触れるのではと思うほどギリギリまで近づきながら、瞳が唇を遠ざけて背後を振り返る。助かったという気持ちと、もどかしく悶える気持ちが混在するも、それを振り払いながら瞳の視線を追い――。

「なっ……あ、ああ……れ、は……」

絶句し、目に映るその機材を見て背筋が恐怖にゾクッと震えさせられる。そこにはテレビ局で使うような本格的なカメラと、それを支える脚、さらには何本ものコードとそれに繋がられるモバイルPCが数台、用意された台に所狭しと並べられていた。

「公開調教……って言えばわかりやすいかしら？ 会員制のそういうサイトでね、ログインメンバーに初華ちゃんの動画を見せながら、どのくらいで堕ちるかを皆で予想したり賭けたりしながら、痴態を愉しむっていうこと……どう、ゾクゾクしちゃうでしょ？」

「ひいっ……そんな……うそ、ですよ、ね……あ、あり得ません、こんな……」

無機質な大きな目に見据えられ、ウェブの向こう側に居る何十、何百という男の存在を意識させられ、全身がカタカタとわなないて止まらない。

(こ、こんな……いやっ、いやですっつ！ わたしの……こんな、姿が……ああ、き、記録されて……み、見られる、なんて……)

「ああ、そうそう……シヨック受けてるとこ悪いんだけどお……ほら」

見開いた瞳の前に、女が携帯を突きつけてくる。そこは体験談とともに露出写真などを掲載する、アップロードサイトらしかった。その画面に映っている十数枚の写真データ、小さくてわからなかったそれを、瞳の指がクリックした瞬間――。

「っつ……ひっ、やつ……いやあああつっ！ うそっ、うそですっ、こんなあつっ！」

「あはっ、泣くほど嬉しかったあ？ うふふふ……そうよ、今日一日の初華ちゃんの行動ほとんど余すことなく押さえられちゃってるの。あたしたちが上げたのもあるんだけど、それ以外の一般人が投稿してくれたのもあるみたい……よかったわねえ、初華ちゃん？ もうすっつかり、この道では有名人になっちゃったんだから……くすっ」

「そ、そんな……の、い……いや、いやですっ……消して、消してえ……つく」

喉元までせり上がった涙声をもはやこらえることもできず、とうとう初華はしゃくり上げて、訴えるような声でささやく。けれどそんな要望を聞き入れてもらえるはずもなく、次々に携帯の表示を変え、自分の受けた恥辱を復習させてくる。

パイプの刺激に足元をふらつかせている姿、蕩けた表情、半裸になって踊り場で着替えている変態的な様子、レストランでの絶頂、そして――エレベーターでのアナル自慰。特に着替えや自慰のシーンなどは、秒単位であるかのように連続した、臨場感あふれる艶め

かしい仕草と表情で撮影されており、見ているだけで羞恥が甦ってくる。それに合わせて、あのおとき感じさせられた身体の疼きと火照りまでが下腹部に込み上げ、思わずブルブルと身震いしてしまうと、それを見て瞳が嬉しそうに微笑んだ。

「気に入ってくれたみたいねえ？ それじゃ、これからのメインイベントにもしっかり貢献してもらおうかしら……鳥越さん、準備はいいのよね？」

「おう、紹介文も入れて……よし、こっちは大丈夫だぜ。嬢ちゃんに説明してやりな了解、と短く答えた瞳がクスクスと笑いを響かせ、耳元に顔寄せてくる。

「っ……こ、こんなところじゃ……すぐに、人が来ますっ……そうすれば……」

「ああ、それは大丈夫よ。ちよつとしたコネもあつてね……今日はこのトイレ、封鎖してもらってるの。だから初華ちゃんが助かるには、最低でも丸一日、屈しないで我慢する必要があるってこと……ま、五時間もあれば余裕で堕ちるでしょうけどね」

「ふざけないでっ、誰が……そんな、簡単にいくなんて……甘く見ないでください！」

声を荒らげて言い返すが、先ほどまで涙を浮かべていた顔に、震える声ではまるで迫力がない。誰も気に留めた様子はなく、ニヤニヤと笑いを浮かべているだけだった。

「制限時間は二十四時間……その間、初華ちゃんがあたしたちの虜にならないよう、我慢すれば勝ち……そうね、全員で自首してあげたっていいわ。それくらいじゃないと、初華ちゃんにとって不公平なものねえ？ どう、悪くないでしょ……れろおっ……」

「ひゅんっ！ ふあっ、や……舐め、ない、れええ……」

ペロツと耳朶を舐め上げられ、思わず声が緩んでしまう。

「ふふっ、だけどお……もし我慢できなくなったら、そのときが……初華ちゃんの最後、あたたしたちのオモチャ決定つてこと。まあ、そうならなつたで、幸せかもしれないけれどね。それが嫌なら、負けないように頑張つてみなさい……んっ、ちゅう……」

「ひうっ、あつ、ひやつ……あむっ、んっ……んうう……ぶあつ……」

耳から首筋に滑つた舌が喉やあごを舐め上げ、そのまま口づけられる。軽く突きだされた舌に口内を舐め擦られ、思わずビククンツと背中を跳ね上げたところで瞳が顔を離し、ゆつくりと下腹部へ移動してゆく。

「それじゃ、スタート♥ あゝゝんっ、んむっ、ちゅぷううん……れろおお……」

「いひいひいっ?! しよっ、ら……ひぐっ、んい……いき、な、りい……ふあんっ!」

チャブツと瑞々しい音を響かせ、瞳が勢いよく秘部に唇を埋めて舌を伸ばした。刹那、触れられた粘膜裏がカアアツと熱く蕩け、一瞬にして膣肉が緩み、牝穴の奥から淫蜜を溢れさせてしまう。下の唇で味わうディープキスの味にお尻が大きく跳ね、股間を彼女の顔に押しつけるようにグラインドしてしまい、その刺激だけでも目が眩みそうだった。

(んひやうううっ、ひゅっ、かっ……しよ、らっ……しひや、やああっ……)

以前に指でされたときよりも遙かに強烈な、そして身体の芯から脱力させられるほど心地よい刺激に、縛られた脚がピンツと張り詰めそうになる。生温かく柔らかい粘膜が媚肉の上で自由に動き、敏感な部分を何度も擦り、吸い上げるその感触——それは、別の部分

で一度だけ味わった、夢のような快感だった。

(んひゅつ、ひゅ、ごおおお……はおつ、こ、こええ……ま、まへつ、にひいっ！ お、おひつ、おひ、りつ……れええ……しや、しやれ、たの……とおっ！)

くねる舌がツプウツと膣口を割り開いてゆく。先端の挿入された舌を受け皿に牝蜜が流れ、ジュルジュルと音を立てて女の口内に吸い込まれるのを感じ、恥辱の炎が頭の中を吹き荒れた。溢れる喘ぎも崩れる表情も晒し続け、山路にされた不浄の穴への愛撫を思いだし、背中が激しく跳ね震える。それがたまらなく屈辱なのに、快楽は止まらない。

「ずじゅるるうう……ぬりゆううつ、ちゅぶつ、じゅぶうう……じゅるれりゆう……」
「やひやつ、ひぎゅつ！ ぬ、ぬひつ、れ……ひやうううつつつ！」

たつぷりと愛液を掬い上げ、それを陰唇や膣前庭に塗り込むように舌が広げられ、這い回ってくる。淫裂を執拗に責められているせいで、まるで膣奥肉までも犯されているかのように錯覚してしまう。膣口を広げさせる舌の感触もその思いを煽り、体液を啜られる羞恥に顔を真っ赤に染め、初華は呂律の回らない拒絶の言葉を吐き叫ぶばかりだ。

「やめつ、ひえつ、ひきいいいんつつ！ いひやつ、はあつ、ふあああつつつ！」

「んぶつ、じゅぶうううつ、じゅるるるつ！ ぷあつ……ふふ、いやあよ、まだまだ責め足りないんだからあ……んぶじゅつ……じゅぶぶぶつ、れるおおつ……」

「いっつ……ふぎいいいいんつつ！ ひあつ、あひいいいっ、ひつ、いひいいいっ！」
唇がびつたりと隙間なく膣口に吸いつき、奥から牝蜜を搾り出すように、はしたなく啜

る音を響かせる。淫肉を飲み込まれるかと思う衝撃に腰がクイツと浮き上がり、女の顔に押しつけてしまう屈辱が胸を穿つ。けれど、押しつけた拍子に鼻先が陰核を押し込んでくると、その感情さえも霧散し、目の眩むような快感電流が膣肉に食い込んで破裂する。

(ひやつ、ぐつ……ら、らめへええ……わら、ひつ……イクツ、イクううつ……)

ビクツビクツと事前兆候のように腰が震え、全身に細かな快感の波が広がり、背を仰け反らせて曝けだした表情が、肉欲一色に染め上げられる。と――。

「んっ……ぷあつ、はい、だあめ……ふふ、イキそうになったでしょ？　すぐにわかつちやうから寸止めも楽でいいわあ……」

「ひっ、へっ……な、なんれえ……んっ、い、え……な、なん、れもお……」

思わず、イカせてもらえなかった不服を訴えそうになり、頬を赤らめて口を噤む。しかし、身体を中心に突き刺さる淫熱と行き場を失った欲求が、下腹で鈍い疼きを発し、無意識のうちに腰がカクカクと揺れ、なにかに擦りつけるような動きを披露してしまう。

(あつ、くう……も、もお……イク、感覚う……か、身体、覚え……ちやつ、て……)

店内やエレベーターでは無理やりイクように仕向けられたのに、今度は一転して焦らされ続ける。心は拒絶しても身体は飢えた獣のように肉悦を渴望し、丸見えになった陰唇はピンク色の媚肉を奥まで覗かせ、唾液を思わせる大量の愛液粘糸を引き伸ばしていた。

「あら、そんなに腰振っちゃって……もう降参？　ほらほら、ネットのコメントもすごいわよ。『淫乱女乙』『もう終わりかよ』『いや、演技だろww』『エロ腰ばねええええ！』『保

存した、つつかしてる』だって……まだまだあるわよ。かなりじつくり見られてるみたいねえ、あんたの惨めな、はしたないトコが……ふふっ、あははははっ!」

傍に置かれた液晶画面からそんな言葉を読み上げられ、先ほど以上の羞恥に初華は顔を真っ赤に染め上げ、懸命にカメラから顔を逸らして映らないように伏せる。

(そ、そうでした……どこの誰が見てるかは知りませんが、こんな姿……こんな、無様な姿を晒すわけにはっ……これくらい、どうってこと……っっ!!)

視界にスッと影が差し、思わずそちらに視線を向けると――。

「おっと、一人だけ愉しむのがイベントだと思ったか？ こっちの相手も頼むぜえ」

「せっかく協力したんですもの、このくらいの役得はありませんと……ねえ？」

「そういうこと……っつてわけで、参加させてもらいまーす♪」

初華に最低の牝辱を味わわせた山路、そして見慣れない二人の女性が個室に入り、動けない初華に近づいてニヤけた笑みを見せつけてくる。

「あなたはっ……それに、こちらの二人は……？ 協力って、なに、を……」

見覚えのない相手を警戒していると、長い黒髪の女性がなんの前触れもなく、不意に初華の腕の付け根に顔を寄せてささやいた。

「覚えておられないでしょうね……電車内では、見られないのが鉄則ですもの……」

「電車……いったい、なにを言っ……え——んひいっ!!」

そのままお嬢様口調で話すその女性は初華の腋に口づけし、ペロリと舌を大きく広げて

舐め上げる。なにをされているのか一瞬わからなかった直後、ゾクゾクッと脇腹から背中へ伝う悪寒を感じ、ようやく意識が追いついて悲鳴を上げるが、女性の舌はまるで止まらず、瞳が秘部へそうしているのと同じように、思いきり唇を吸いつかせてきた。

「ちよっ……んひっ、ふああ……そっ、な、とこおっ……な、舐めえ……ひゃうっ！」

舐められるどころか触れられただけでくすぐったさを感じる敏感な肌には、女性が唾液をたっぷり擦り込み、何度も何度も舌を往復させる。その感触に背筋がジンと痺れ、たまらず身をくねらせて眉をひそめると、その顔を覗き込んでもう一人が笑いをもらす。

「でもアタシたちはちゃんど見てたよー？ お姉さんが電車の中で半裸になつて悶えまくって、そのままホームでダッシュしてたとこまでさ……いやー、傑作だったよ！」

「なっ……あなた、まさ、かあっ……んうっ、ちよつとっ……きやあああっ！」

「ん〜？ なにいまさら恥ずかしがつてるのさ。こんな薄いの、着てても着てなくつても、周囲からは裸にしか見られてなかつたよ……変態お姉さん？」

ニヤニヤと笑いながら、初華のキャミソールを思いきりめくり上げたショートヘアの少女は、明らかに初華よりも年下だった。その言動とは裏腹に、純真無垢な笑顔を浮かべるせいで思わず目を奪われそうになるが、なんとか毅然と視線を尖らせて返す。

「で、電車で……わたしを、あんな……はひゅっ、はっ、恥ずかしい、目……にひっ、はっ……はわっ、遭わせ、たのお……がつ、あなた方、だと……ひうんっ！」

仔犬のように腋を舐める黒髪女性の舌使いに嬌声をもらしながら、それでも問い詰める

ように告げると、無邪氣そうな少女はニッコリと満面の笑みを浮かべた。

「うん、そーだよー。アタシたちだけじゃなくって、他にもいたんだけど……ま、代表してアタシたちで相手してあげるってなったの。じゃ、よろしくねー？ んちゅう……」

「んむうううっ!! ふあっ、ひゃっ……なにつ、ひゅっ……んうううっ!」

唇が塞がれ、そのまま抱きすくめられたかと思うと、乳房を包んでいた締めつけがハラリと解き放たれた。一瞬でホックを外されたことに気を回す余裕もなく、口づけで口内を陵辱しながら、少女の手が乳房を痛いくらいに握り締めてくる。

「んんうううう……んぶっ、んつく……ごくつ、んじゆる……」

痛みにビクウツと背中を跳ね上げた瞬間、今度は劣るような優しい手つきで手の平が乳房を撫で回し、マッサージしながら指先で突起を弄り捏ね回す。痛覚によって敏感にされた肌と乳房が、丁寧な少女の愛撫でゾクゾクツツと甘い疼きに痺れさせられ、強張った身体がすぐさま脱力させられる。力が抜けた初華の身体を優しく抱き、少女の舌は口内を余すところなく舐め回し、大量の唾液をドロオオオ……と喉奥へ注ぎ込んできた。

「ふあっ、ひゅっ……んむっ、んぐっ……ごきゅっ、じゆるっ……くぶうっ……」

「んふふ……じゅぱっ、じゆるっ、じゅぶううう……んじゅっ、んぢゅうう……」

背中がスリスリと擦られ、そうかと思えばよしよしと頭を撫でられ、乳房への優しい愛撫も止められることはない。強制的に愛おしさを植えつけられ、拒絶する意思をも奪われそうになる少女の手技口技に初華は瞳をトロンと細め、絡められる舌をおずおずと伸ばし

返してしまった。すると少女も嬉しそうに舌を吸い上げ、温かい口内で扱き上げる。

「おむううう……んぷっ、じゅばああ……んくっ、んうう……ぶじゅっ……」

乳房と口内を蹂躪する快楽に合わせ、腋の下からも切ない疼きが止めどなく押し寄せてくる。くすぐったさが大半を占めていた女性の舌の感触が、次第にねちっこく動くようになり、身体の奥へと染み込んでくるような刺激を唾液とともに肌へ塗り込める。ヌルヌルと這い回る感触は嫌悪などまるで感じられず、柔らかなスポンジとソープで洗ってもらっているような、夢見心地へと誘う最高の感触だった。

「んんうう……ふあっ、はあっ……あはああ……」

唇が離れると、そこからもれるのは甘く熱っぽい吐息ばかりで、全身は感極まったようにぐったりしてしまう。それなのに、口元に唾液を垂らされると反射的にチュッと吸い上げ、犬が主人に尾を振るように、舌先をパタパタと揺らしていた。

（な、んれ……これえ、お口……トトロトお……す、ごい……敏感、んっ……）

自らの舌の感触にもビクッと身体が震え、そこに少女の笑い声が降り注ぐ。

「お姉さんも、キス好きなんだねー。これだったら、電車でもしてあげればよかったかなあ……ま、それはまたしてあげるね。次はこっち……はむっ！」

「ひっ……んひいいいっつ！ あひゅっ、やひゃっ、はっ……はげっ、ひいいいっつ！」

手の平でゆつくりとほぐされ、性感を解放させられた乳房に少女の唇が貼りついてくる。その刺激だけで背中が大きく跳ね上がったが、追いうちをかけるような舌の動きが乳首を

上下にペチペチと弾き、目の前に火花がバチバチイツと散りばめられた。

濃密キスに誘発された快感刺激が、胸の奥で一気に膨らみ、身体中の神経が快感で犯され、剥きだしにされたかと思うほど過敏に研ぎ澄まされる。陰核を捻り上げたような鋭い刺激に官能を押し込まれ、瞬く間に快感の波が全身を包み込む——けれど。

「ひやぐううっ……んああっ、らめっ！ ひぐっ、イクううっ……あっ、あああ……」

絶頂のギリギリまで引き上げられた快感の炎だったのに、またも燃え盛る頂点を迎えることができず、ゆっくりと沈められてしまう。

「おっとと、危ない危ない……でもちゃんと言えたんだね、イイ子イイ子ー♪」

「んちゅ……ふふふ、可愛いしい声でお喋きになるものですから、熱が入ってしまいましたわ……電車のときから思っておりましたが、随分と苛めがいのあるコですわね……」

愛撫の手を止めた女性らが指先で初華の唇を撫で、嗜虐的な、それでいて魅力的な笑みを浮かべてくる。天使のような悪魔の笑みにゾクゾクッと背筋を震えさせられるが、それが快感からなのか恐怖からなのか、性に翻弄される少女には区別がつかなかった。

「おいおい、アンタたちばかりで愉しまないでくれよ……おら、俺にも頼むぜ、お嬢ちゃんよ。前にあんだけケツマンコ可愛がってやったんだ、少しくらい恩を返してくれたって、バチは当たらねえだろうが……へへへへっ」

「んえ……っつ、ひっ、やあああっつ！ なにっ、してるんですっ……」

頭の横、少し上のほうから声が聞こえてそちらに顔を向けると、目の前に飛び込んでき

たおぞましい塊に視界を塞がれ、喉奥から悲鳴が迸る。

「なにつて、チンポ見せてんだろうが。てめえのケツマンコに突っ込んで、ぐちよぐちよに腹中掻き回して、散々よがらせてやったんだ……覚えてねえわけ、ないよなあ？」

「つつ……そ、それは……あなたが、無理、やりい……んっ、くっ……はあ……」

否定し、目を背けようとするが、山路の言葉にあのときの感覚が思い起こされ、身体と顔が麻痺したように動かなくなる。瞳に映るドス黒く濁った肉塊は、遅しく隆起して赤黒い先端を透明の腐液でテラテラと光らせ、めくれ上がった包皮との密着部分からは、絡みついた白濁の滓がすえた汗臭さを漂わせる。幹には太い血管が幾筋も張りだし、時折ビクンッと跳ねて性欲の昂りを訴えかけていた。その巨大な肉塊が自分の不浄の穴を、緩むほど激しく犯していたなんて——そんなこと、まるで信じられない。

（これ、が……男性器……す、すぐく……大きくて、た、遅しくって……こんなに不潔なのに、なんだか……んっ、目を、離せない……どうしてえっ……）

見ているだけで背筋が得も知れぬ痺れに包まれ、キュウウツと膣肉がわなないてしまうのを感じる。なにかがおかしい、気の迷いだと心に言い聞かせるも、女たちの手や舌で完全に発情させられた肉体は、味わったことのない牡を本能で求め、淫らな涎をダラダラと吐きこぼれさせる。

「はあっ、はっ、はああ……んっ、ふああ……くふっ……うううんっ……んあっ……」

「ふふっ……ん？ あら……初華ちゃん、トロトロの涎が下のお口から、思いつきりこぼ

れちゃってるわよお？ オチンポ、見てるだけで興奮しちゃったのかしら？」

「あつははー、乳首もピンツッて勃っちゃってるよ！ ほら、カメラに映してあげるね」

カメラの真正面からはつきり捉えられた乳房は、中央の桃色突起をヒクヒクと震わせながら、まるで男の怒張のようになっすぐ上向きに勃起させている。空気の流れに擦られて、ピクツ、ピクンツと健気に蠢き、小振りながらも快感を甘受していることを声高に訴えかけているようだった。それを映すモバイル画面を見せられ、羞恥に耳が赤く染まる。

「あうっ、いつ、ひやああ……こんな、うそお……んくっ、はっ、んはああ……」

「まあまあ、コメントも凄い勢いですわ……ご覧くださいな。『チンポ見てるだけでイキそうだな』『露出狂だし、こんなもんだろ』『乳首イキも見たいなww』『くっそおおおおっ、早く堕ちろおおおっ！』等々……うふふ、大人気のようですわね」

次々とささやかれる嘲笑の言葉に顔を真っ赤にし、イヤイヤするように頭を振って、自身の状態を否定する。だがその間にも股間からは、いやらしい滝が溢れ続けていた。

「うぐっ、ふううんっ……こ、こえ、はあ……ひが、ふのお……わらひ、違うう……」

「違わないでしょ？ 山路さん、構わないから擦りつけてあげたら？ このコもそれで見覚えると思うわ。自分がどうしようもない淫乱女になっちゃったってことをね」

「ふへへっ、そうだな……なら、さっそく……つと、おおおっ！」

「いひっつ……いやあああつっ！ やだっ、離れてっ……あつ、うっ……あああ……」



この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>

キルタイムコミュニケーション小説シリーズ あなたはどのタイプ？



ドキドキラブな
ハーレム系ライトノベル！

二次元
ドリーム文庫

サイズ:文庫

戦うヒロインが屈服されちゃう！
かなり過激なライトノベル！

二次元
ドリームノベルズ

サイズ:新書

※「二次元ドリームノベルズ」は18歳未満の方は購入できません

日常に密着したエロス、リアルな
舞台設定で送る官能小説レーベル！

リアルドリーム文庫

サイズ:文庫

フリーダム度120%!?
ジャンルにとらわれないドキドキ★ラノベ！

あとみっく文庫

サイズ:文庫

詳しくはKTCの公式サイトにて！

キルタイム

検索

Click

電子書籍版も各ダウンロードサイトにて続々配信中!!



キルタイムコミュニケーション オフィシャルサイト

<http://ktcom.jp/>

- 雑誌、コミック、小説の通信販売もやってるよ!
- 二次元ドリームマガジン・コミックアンリアルのバックナンバーも買えるよ!
- ジャンル別で作品も選べて超便利!
- 二次元編集部のおいしいBlogも更新中!



<http://www.comic- Valkyrie.com/>

KTCの戦うヒロインオンライン漫画雑誌! 18禁ではないからこそ表現できるドキドキがある!!



<http://www.cran-berry.com/>

二次元ドリームノベルズがアニメにも進出! 新生ブランド・cranberryをよろしく!!



<http://www.mille-feuille.jp/>

二次元ドリームノベルズから生まれた美少女ゲーム! 「ミルフィーユ」ブランドにて続々登場!



<http://www.2d-dream.jp/>

二次元ドリームノベルズが携帯電話で読める! 携帯サイト限定の書き下ろし小説もあるよ!

